

## 終戦七十五年

市川 浩

八月十五日七十五回目の終戦記念日を迎ふ。十三歳中學二年生の我々は、翌年からの全面的學徒勤勞動員を緩和すべく、飛行機工場への隔週出勤を前倒し、三年生の隔週授業を確保せむとしをりき。當日は工場の記念日か何かとて休日のため、家にて玉音放送に聞き入りたり。

空を見上ぐれば濃き紫色に澄み上がりて世は何も變らざらめど、第一次大戦敗戦國たる獨逸國民の悲惨を思ひ、我國の前途に暗澹の念を抱きけり。

直後米軍主導の聯合國軍による占領政策は敗戦國に對して厳しくありて、憲法を始め、教育や言語政策など矢繼ぎ早に變革せられ、六等国、アジア最貧國化呼號せられたり。幸ひ世界情勢の轉換もありて、我が國民の勤勞努力により、我國は最惡の筋書を免れたるのみならず一時世界第二位の經濟大國に上り詰む。

此の間、戦火に消失せる製造業は復興に當り設備の技術革新を遂げ、その後の經濟發展を支ふる一方、戦災寡き農業は戦後の食糧供給に盡力し、遂に米の配給制度を支へ畢んぬと雖も、抜本的の構造改革の機を逸し、農工不均衡の儘推移す。而も工に於ても、第三次産業革命と稱せらるゝ電子産業にては、國産の操作演算系を持たざる基本技術の脆弱さを克服し得ず、今次の新型コロナウイルス問題に於ても、行政機構に於ける電子系の餘りの前近代的對應は國民を驚かせり。一方に於て超大型電算機「富嶽」は世界一の評價を受く。曾ては世界一の戦艦「大和」を建造せるも、兵士携帯の銃器は舊式其ものたりし舊軍を想起せしめたり。

最近の電視にては前の大戦の反省とて、庶民の受けたる戦禍の記憶を連日放映し、以て平和の尊さを強調す。無論之も最重要の事なるも、同時に戦中及び戦後の歩みに對する反省も必要なるべし。其の意味に於てバブル崩壊後を顧みるに、當初我國の經濟はなほ堅調を維持し續くるも、日米の「經濟戦争」激化す。この時日本は、自らは敗戦國にして國際聯合の規約にも依然「敵國條項」の對象國なるを自覺し、第一勝者米國には賢明なる讓歩、世界には協力的經濟援助を行ふべきなりけむ。實態は國內産業の保護、海外低賃金勞働力の確保のみ

に狂奔す。そこへ經濟學留學歸りの知的指導層、頻りに地球一極主義を唱道し、折からの環

境問題に關し、「宇宙船地球號」なる美しき合言葉あるに併せ、グローバル化こそ我國の最重要課題となれ。かくて折角築き上げたる日本的經濟運営をば世界に通用せずとて、次々に弊履の如く捨て去り、氣が附けば世界第二位の座を失ふのみか、忽ち第五位前後に轉落す。

斯くて「日米經濟戦争」は日本の「獨り負け」に畢れり。此の傷跡は長く禍根となりぬべく、産業は一次工程既に國外に流失し、工程單純の醫療用マスクさへ自給に數カ月を要せるは其の一例に過ぎず。更にコロナ禍による國家財政の負擔も亦大なり。されど今、自國通貨

による赤字國債は國家財政破綻に一義的には繋がらずとする現代貨幣理論 (Modern Monetary Theory)、以前より非公式には密かに話題となりしが、之に眞つ向より反對の財務省が何と平成十四年、此の理論を翳して「赤字國債による債務不履行の懼れなし」との公式見解を發表せりとぞ。暗夜に光明の一燈と思しきも、頼みの國內資産既に奔流の如く海外に流失しつゝあり、折角の理論も基本条件の崩壊ありては役に立たざらむ。二度の敗戦を冷静に受止め、徒らに戰勝國追隨に走らず、我國の歴史を通じて傳へ來れる多様性尊重の風土に「創造」を育成すべきなり。

(令和二年八月二十七日受附)